



## 👁️👁️ みどころ

米国と日本には「法廷モノ」の名作が多いが、近時はドイツ、韓国にも、さらに中国やインドにも。そんな中、日本人には馴染みの薄い中東の国、レバノンにも本格的な法廷モノが登場！

1審は本人訴訟だが、控訴審では著名かつ老獪な弁護士と、若手の人権派女性弁護士が就いて本格的論争が始まるが、そもそもこれは刑事事件？それとも民事事件？民事事件なら“請求の趣旨”は一体ナニ？

アーヴィング vs リップシュタット事件をテーマとした『否定と肯定』（16年）ではドイツの法律や裁判制度が難しかったが、本作ではレバノンの法律と裁判制度がよくわからない。その上、民族、宗教はもちろん、「パレスチナ難民」「ヨルダン内戦」「ダムールの虐殺」等の政治問題も難解だ。しかし、本作の裁判のテーマは、人間の尊厳。その誇りを守るため、2人の男はなぜここまで争ったの？そして、タイトルはなぜ「2つの希望」とされているの？

法科大学院の院生はもちろん、内向き志向の強い日本人は『三度目の殺人』（17年）や『検察側の罪人』（18年）等の日本の法廷モノに満足せず、本作もしっかり勉強を！

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■レバノン映画に本格的法廷モノが登場！■□■

レバノンはシリアの西側、そしてイスラエルの北側にある人口約600万人の国で、面積は日本の岐阜県程度の広さ。宗教はキリスト教とイスラム教を中心として18の宗派が存在し、キリスト教マロン派、イスラム教スンニ派、イスラム教シーア派などの各宗派に

大統領、首相、国会議長等の政治権力が配分されているようだ。それらの宗派の名前やパレスチナ難民という言葉は日本人もよく知っているが、1970年に起きた「ヨルダン内戦」(黒い九月事件)や、「レバノン軍団」、更に本作後半の大きなテーマとして急浮上してくる1976年1月の「ダムールの虐殺」になると、ほとんどの日本人はサッパリ知らないはずだ。もっとも、1972年に元日本赤軍のメンバーである岡本公三が、奥平剛士、安田安之と共に起こしたテルアビブ空港乱射事件は有名だから、彼が共に闘っていたパレスチナ解放機構(PLO)傘下のパレスチナ解放人民戦線(PFLP)によるパレスチナ解放闘争も有名だ。

私がかねてから『シネマから学ぶ法律』というテーマでの執筆、出版を狙っていたが、近時、韓国では『弁護人』(13年)、『シネマ39』75頁)や『依頼人』(11年)、『シネマ29』184頁)という本格的法廷モノが登場した他、インド映画でも『裁き』(14年)、『シネマ40』246頁)という本格的法廷モノが登場してきた。また、イラン映画でも本格的法廷モノではないが、『別離』(11年)、『シネマ28』68頁)という面白いミステリー、推理モノが登場している。そんな中、突如レバノン人のジアド・ドゥエイリが監督・脚本したレバノン・フランス合作による本格的法廷モノたる本作が登場し、第90回アカデミー賞外国語映画賞にノミネートされた他、第74回ベネチア国際映画祭最優秀男優賞を受賞する等、広く国際的評価を集めたからビックリ。本作は8月に大阪ステーションシティシネマやシネ・リーブル神戸で公開されるため、その鑑賞を予定していたが、本作の配給宣伝をしている友人から早々に試写の案内をもらったため、こりゃ必見!と考え、久しぶりに弁護士の子息と共に鑑賞。さあ、法律や訴訟手続きはもとより、宗教も政治も日本とは全く異なる国、レバノンにおける本格的法廷モノは如何に・・・?

## ■□■ジアド・ドゥエイリ監督の問題意識は?■□■

レバノンの首都はベイルート。ジアド・ドゥエイリ監督は1963年にそのベイルートで生まれ、レバノン内戦下で少年期を過ごした後、20歳の時にレバノンを離れてアメリカに留学し、サンディエゴ州立大学で映画学位を取得した。卒業後、クエンティン・タランティーノ監督のカメラ・アシスタントとして働き、1998年から監督業を始め、次第に国際的評価を高めてきたらしい。ちなみに、イスラエル人俳優を起用し、イスラエルで撮影を行った『The Attack (原題)』は、政府によってレバノン国内での上映が禁止されたが、同作はサン・セバスチャン国際映画祭審査員特別賞ほか世界中で上映され高い評価を受けたようだ。それを聞いて私は一瞬、中国におけるジャ・ジャンクー(賈樟柯)監督や、ロウ・イエ(婁燁)監督等の「第六世代監督」と似たようなもの?と考えたが、多分それは違うだろう。

本作のパンフレットにある「ジアド・ドゥエイリ監督 インタビュー」で、同監督は、「この映画は、現在のレバノンの社会状況が描き出されていると考えて良いのですか?」との

質問に、「いいえ。この映画はもっと身近な出来事、つまり、私自身が数年前にベイルートで実際に経験したことをベースにしています。」と答えた上で、「それは、ある配管工の男性とのごく普通の口論から始まりました。そこで激昂してしまった私は、映画のセリフと同じような言葉を口にしてしまったのです。」と答えている。

ここでいう、「映画のセリフと同じような言葉」とは、本作の法廷闘争の原因となった「シャロンに抹殺されていればよかった！」という言葉だ。その言葉を日本人が理解する上で必要最小限必要な知識は、シャロンとはナニか？だが、ここでいうシャロンとは、対パレスチナ強硬派として知られた第15代イスラエル首相のことだ。ちなみに、本作のパンフレットにはパレスチナ難民やヨルダン内戦等、いくつかの「キーワード解説」があるが、そこではアリエル・シャロン（1928年 - 2014年）について、次のように解説されている。

#### アリエル・シャロン（1928年 - 2014年）

第15代イスラエル首相。対パレスチナ強硬派として知られ、2001年の首相就任後はヨルダン川西岸地区における「分離壁」の建設開始やガザ南部でのイスラエル軍による大規模家屋破壊を指示するなど、パレスチナに対して苛烈な政策をとった。国防相時代の82年にはガリラヤ平和作戦としてレバノンに侵攻。軍をベイルートにまで進軍させるが、サブラ・シャティエラの虐殺事件の責任を国内外から厳しく追及され国防相を辞任。14年死去。

ある日、現実そんな言葉を口にしてしまったジアド・ドゥエイリ監督は、これは脚本の題材になると思ったそうだが、インタビューにおけるその説明は次のとおりだ。

#### 些細な出来事だったのかも

しれないけれど、無意識ではちがう。そういう言葉を口にしてしまうということは、非常に感情的になっているということです。その日は、この映画の脚本を一緒に書いているジョエル・トゥーマもいて、彼女から謝罪に行くように言われました。ところが、男性が私の謝罪を拒否したので、私は彼の上司のところへ行きました。私が謝罪の意を伝えると、その上司はこの一件を、男性に対する解雇理由の一つに加えたのです。私はその場で彼のことを弁護しました。それからしばらくして、これは脚本のいい題材になると思いました。

なるほど、なるほど・・・。

## ■□■排水管工事のトラブルが発生！これが後の法廷闘争に！■□■

とある夏の日、連日政治闘争に明け暮れている（らしい）レバノンの首都ベイルートでは、今日もキリスト教マロン派の民兵組織で、右派政党である「レバノン軍団」の党首が多くの聴衆を前に過激な演説を行っていた。レバノン軍団の熱心な支持者で、ベイルート

で自動車修理工場を営む男、トニー・ハンナ（アデル・カラム）は、妊娠中の妻シリーン（リタ・ハーエク）と共にアパートに住み、平穏で安定した生活を送っていた。他方、パレスチナ難民地区に住む、パレスチナ難民ながら住宅街一帯で行っている違法建築の補修工事の現場監督として働いている男、ヤーセル・サラメ（カメル・エル＝バシヤ）は、トニーの住むアパートの排水管から水が漏れ出ていることに気付いたため、その排水管の付け替え工事をするに。ところが、その工事の了解をトニーからもらっていなかったようだから、日本人の感覚からするとそりゃ如何なもの・・・？他方、ベランダからその工事を目撃したトニーは、ハンマーでその排水管を壊してしまったから、それも如何なもの・・・？

ヤーセルの上司である所長のタラール（タラール・アル＝ジュルディー）は、とにかく無用なトラブルを未然に防止するという観点から、ヤーセルの代わりにまずは1人で手土産を持ってトニーの自宅を訪問。トニーは留守だったが、妻のシリーンにチョコを渡して謝罪したところ、シリーンはそれを快く受け入れたので、これにてコトは円満に収まるように思えたが・・・。

## ■□■ささいなトラブルがなぜ殴打事件に？なぜ裁判に？■□■

本作導入部を観ていても、私を含むほとんどの日本人には、レバノン軍団を熱烈に支持しているトニーがベイルートに自宅と職場を持ったベイルート市民としての誇りを持つ男であるのに対し、ヤーセルは工事の現場監督という仕事こそ与えられているものの、パレスチナ難民地区に住むパレスチナ難民であることは容易にわからない。しかし、トニーにはきっとヤーセルがレバノン市民ではなく、パレスチナ難民だということがすぐにわかったのだろう。そのため、トニーの不満は、ヤーセルらが勝手に排水管を付け替えたことその他、きっと「パレスチナ難民のくせに！」「パレスチナ難民風情が！」という意識があったのだろう。

本作導入部にみるトニーは、妻には優しく接していたし、仕事も従業員を使って真面目にやっている温厚そうな男。そして、タラール所長に対する対応も極めて普通だが、ヤーセルに対してはトコトン強硬で、かなり意地が悪い。そのため、わざわざタラールの現場事務所を訪れたトニーは、「チョコでごまかす気か！」と叫びながらチョコを投げ返したから、アレレ・・・。そのため、タラールは嫌がるヤーセルを説得し、無理にでも頭を下げさせるべく再度トニーの職場を訪れることに。そこで表面上だけでもヤーセルが謝罪する姿勢を示せばいいのだが、いかんせん不器用なヤーセルはなかなかそれができなかったから、こちらもアレレ・・・。そのため、そこではトニーの口からヤーセルに対して「お前らはろくでなしだ。人に謝罪すらできないから評判が悪い・・・・・・・・・・シャロンに抹殺されていけばよかった！」という何とも辛辣な言葉が投げかけられることに。そして、思わずこれにカッとなったヤーセルは、トニーの腹部に強烈なパンチをお見舞いすることに。

前述のとおり、ここらまではジアド・ドゥエイリ監督が現実体験したことを脚本化したものだが、ここでトニーの肋骨が2本も折れてしまったというのは、きっと映画化のために話を大げさにしたものだ。これによって入院を余儀なくしてしまったトニーの怒りは頂点に達し、妻の諫めにも耳を貸さず、告訴に踏み切ることに。しかして、トニーの告訴で始まった第1審の裁判は？

## ■□■請求の趣旨は？法廷の風景は？審理の進め方は？■□■

ヤーセルの暴行（パンチ）によってトニーの肋骨が2本折れ、入院を余儀なくされたことは間違いないから、日本なら被害者であるトニーが警察に刑事事件として告訴すれば、ヤーセルには略式命令によって罰金刑が下される可能性が高い。肋骨が2本折れたという怪我の大きさと、トニーの嚴重処罰を求める意志の強さを考えれば、正式裁判の可能性や罰金刑ではなく（執行猶予付き）懲役刑の可能性もないではないが、傷害事件の動機としてトニーの“暴言”があったことも確実だから、日本ではまず正式裁判や懲役刑はないはずだ。

しかして、本作ではまずヤーセルが警察に対して自分の傷害行為を自首する姿が登場するから、ヤーセルに対する何らかの刑事処分は既に国が下しているはずだ。しかし、本作ではそれについての説明が全くないまま、トニーとヤーセルとの第1審の訴訟の姿が描かれていく。したがって、どうやらこれは刑事裁判ではなく民事裁判のようだが、そこでの日本流に言う“請求の趣旨”はナニ？また、この裁判は、治療費や慰謝料を求める不法行為に基づく損害賠償請求なの？あるいは、トニーがさかんに言っていたように、謝罪を求める裁判なの？

はじめてのインドの本格的法廷モノである『裁き』（14年）では、扇情的な歌を歌ったカースト出身の歌手が、ある下水清掃人の自殺幫助罪で起訴され、有罪か無罪かが争われていた。そして、そこでは有能な裁判官の訴訟指揮の姿と共に、検察官と弁護人が立ったまま書記官、事務官らを挟んで裁判官と向かい合い、証人席はその左右に配置されている法廷風景が興味深かった（『シネマ40』246頁）。本作の第1審は、弁護士なしのトニーによる本人訴訟だが、あっと驚いたのは被告とされたヤーセルが、手錠は外されたものの檻の中に入れられる状態で審理に出席し、檻の中から裁判長の質問に答えていること。ヨルダンの法廷は一体どうなっているの？

他方、裁判長が要領よく2人の言い分を聞いて争点を整理していく姿はさすがだし、“排水管”を巡る争いが問題の本質ではないことを鋭く見抜いたのもさすが。そこで裁判長が、ヤーセルが暴行を働ききっかけになったトニーの侮辱的な“暴言”について質問したのは当然だが、それに対してトニーが証言しなかったのは一体なぜ？さらに、ヤーセルも「お前らはろくでなしだ。人に謝罪すらできないから評判が悪い……シャロンに抹殺されていねばよかった！」と言われたことを証言しなかったが、これも一体なぜ？

## ■□■ 1 審判決は？控訴審は双方が弁護士を？ ■□■

日本でも即日結審、即日判決の制度があるが、スクリーン上で展開される、本人訴訟を巧みに訴訟指揮している裁判長の姿を見ていると、レバノンの裁判官もさすがと感心させられる。しかし、傷害事件の誘因となった侮辱的な“暴言”の内容について双方が口を閉ざした結果、裁判長が下した“証拠不十分による棄却”という判決は如何なもの？もともと、前述したとおり、弁護士の私ですらそもそも本件訴訟の“請求の趣旨”がわかっていないため、何が棄却されたのかもわからないから、この本人訴訟による1審訴訟の内容については基本的にチンプンカンプン。日本なら判例時報やジュリスト等で判決の評論がされるが、さてレバノンでは・・・？

そこで敗退したトニーが裁判長に対して大声で悪態をつく姿も日本では考えられないマナーの悪さだが、さあ彼はこの判決を不服として控訴するの？その場合は、やはり弁護士に依頼するの？本作ではその後、大手弁護士事務所の切れ者のベテラン弁護士ワハビー（カミール・サラーム）に依頼する姿が登場するが、さて、その弁護士費用はHow much？また、豪華な事務所での打合せでは、トニーは勝訴することに徹したワハビー弁護士の弁護方針を徹底的に教え込まれたが、トニーはそれに率直に従うの？他方、控訴されたヤーセルはトニー以上に弁護士費用の負担はできそうにないが、控訴審はどうするの？

## ■□■レバノンにも人権派弁護士が！父娘弁護士が激突！ ■□■

『709の人たち 一不屈の中国人権派弁護士と支援者たち』（17年）（『シネマ41』未掲載）における中国の人権派弁護士への弾圧はひどいものだった。そして、それは7月22日にNHKスペシャルで放映された『消えた弁護士たち 中国“法治”社会の現実』でも同じだった。他方、韓国の法廷モノ『弁護人』（13年）（『シネマ39』75頁）は、釜林（プリム）事件で逮捕され、拷問される学生を弁護する故・盧武鉉大統領の若き日の人権派弁護士としての姿を描いていたが、どうやらレバノンにも、自らヤーセルの下に足を運び、手弁当でその弁護人（代理人？）をやってやろうという人権派弁護士がいるらしい。それが若手女性弁護士のナディーン・ワハビー（ディヤマン・アブー・アブード）だが、こんな新米（？）の弁護士で、大手事務所を取り仕切っている老練なベテラン弁護士ワジュディーに対抗できるの？昔のテレビで『赤かぶ検事奮戦記』という法廷モノがあったが、そこでは検察事務官からのたたき上げで検事になった男と、その娘の弁護士が毎回法廷で対決するのが一興だった。しかし、ジアド・ドゥエイリ監督は本作でそれと似たような“あつと驚く仕掛け”を用意しているので、それに注目！

それはともかく、組織力やカネの力ではワジュディー弁護士とナディーン弁護士は段違いだが、依頼者の利益のためにトコトン頑張るという点ではナディーンはワジュディーに何ら遜色はないようだ。そのことは法廷で次々と展開される証人尋問の風景を見れば明らか

かだから、とりわけ法科大学院の院生諸君は、そんな尋問テクニックに注目。ちなみに、公判が32日間も連続して開かれたアーヴィング v s リップシュタット事件を描いた『否定と肯定』（16年）（『シネマ41』214頁）では、総額200万ドル（約2億3千万円）を要したリップシュタットの弁護士費用を広く社会から応援してもらったそうだが、本作でヤーセルについてのナディーンへの弁護士費用はホントにゼロらしい。日本では、国選の刑事事件では国からそれなりの報酬があるし、民事事件でも法テラスの法律扶助事件では国からの報酬があるが、そんな制度のないレバノンでナディーンはなぜヤーセルの辩护人（代理人）になったの？本作ではナディーンへの熱心で素晴らしい弁護士活動に注目するとともに、そんな点についてもじっくり考えたい。

## ■□■ 2人は何を求めたの？裁判は世論を二分！ ■□■

パンフレットにみるジアド・ドゥエイリ監督のインタビューによると、彼の両親は弁護士と裁判官らしい。そのため彼は「法律一家に生まれた私にとって、正義と言うのは常に重要な意味を持っていました。」と語っている。しかし、トニーがヤーセルに求めたのは「謝罪」だということは導入部からハッキリしているが、なぜヤーセルは素直にトニーを殴ったことを謝罪できなかったの？他方、ヤーセルの立場に立てば、「シャロンに抹殺されていればよかった！」と侮辱されたのに、なぜ俺が謝罪しなければならないの？謝罪なら、まずトニーが俺に対してその侮辱発言を謝罪すべきだ、ということになる。

そのため本作にみる2人の対立は、表面上はささいな口論だが、その本質は民族や宗教さらには人間の尊厳や誇りをかけた対立ということになってしまう。そして、それが控訴審では双方とも弁護士をたてた争いとなって社会的注目を集めたため、宗教、民族はもちろん政治的な争いにも発展していくことに。そのため、街では暴動に発展した上、トニーの自宅には無言の脅迫電話がかかってくるわ、ヤーセルはトラブルを嫌う建設会社から解雇を告げられるわ、いやはや、レバノンの街全体が大変な事態に・・・。

法廷劇の焦点は次第にヤーセルとトニーの本人尋問になってくるが、そこで両弁護士が突っ込んでいくのは排水管を巡るトラブルの事実関係ではなく、互いの過去や内なる苦悩の内容になる。そして、そのハイライトは、法廷内での「ダムールの虐殺」を撮影したDVDの上映。これはレバノン内戦中に発生した一連の事件の一つで、PLO関連組織やレバノン左派組織と結託したイスラムの武装集団がベイルートの南に位置するマロン派キリスト教徒の村ダムールを襲撃し、住民を虐殺し、500人以上の民間人が犠牲になったとされる事件だが、マロン派キリスト教徒であるトニーはこの「ダムールの虐殺」といかなる関わりを持っていたの？日本人には容易に理解できない論点がたくさん含まれているが、本作のパンフレットの解説をじっくり勉強しながら、手に汗握る法廷劇のそんなクライマックスをじっくり鑑賞したい。

## ■□■訴訟以外の2つのエピソードにも注目！■□■

インドの本格的法廷モノである『裁き』と同じように、本作でも1審の裁判官の訴訟指揮が見事だが、控訴審ではその見事さがより一層際立っている。法廷での「ダムールの虐殺」のDVD上映はレバノンでも異例だと思うのだが、あえてそこまでの証拠調べをしたのは、“当事者の納得”を高めることと、本件が大きな社会的注目を集めていたためだろう。このように、本作の法廷劇は来るべき控訴審判決に向けて期待を高めていくが、他方法廷外のちょっとしたエピソード(?)にも大きなインパクトがあるので、それにも注目!

その第1は、法廷から帰ろうとする2人が車の前で遭遇し、互いに車に乗り込むものの、ヤーセルの車のエンジンがかからないこと。トニーはさっさと出て行ったのだが、どうもヤーセルの車のエンジントラブルらしいと気付いたトニーはわざわざ戻り、自動車修理工らしくヤーセルの車をチェックしてやると、たちまちトラブルは解消。それはそれでなるほどだが、ここでの問題はなぜトニーはヤーセルのところに戻り、“親切心”を発揮したのかということだ。

もう1つのエピソードは、ある日ヤーセルがトニーの自動車修理工場を訪れ、わざと(?)トニーを挑発して自分の腹にパンチをくらわせたこと。そんな計画をヤーセルの弁護士のナディーンが事前に聞いていれば当然「やめろ!」と言ったはずだし、事後報告を聞いたとしても「なぜ私に黙ってそんな勝手なことを!」と怒ったはず。つまり、弁護士にしてみれば、依頼者のこんな勝手な行動は絶対容認できないものだが、さて本作の場合は?

第1のエピソードはともかく、第2のエピソードは下手すると新たな紛争になりかねない危険が大きい、「弁護士である母は、法廷のシーンについてアドバイスしてくれました」と語っているジアド・ドゥエイリ監督は、なぜ本作にこんなエピソードを挿入したの?本作を鑑賞するについては、それについてももしっかり考えたい。

## ■□■控訴審判決は?「ふたつの希望」とは?■□■

NHK大河ドラマ『西郷どん』の7月29日放映分では、徳川慶喜から長州征伐軍の参謀に命じられた西郷どんが、単身で長州(岩国)に乗りこみ、「禁門の変」の責任を長州藩の3人の家老の切腹等で取らせることによる和解(=戦争の回避)を果たす姿が描かれていた。その数年後の西郷・勝会談による江戸城の無血開城は有名だが、この事実は意外に知られていない。

白熱した控訴審の審理もいよいよ終了。あとは判決を待つばかりだが、ここまでこじれた法廷闘争なら、控訴審判決が出て次は最高裁へ!日本人なら誰しもそう思うのは当然だ。それは7月30日に福岡高裁で下された、諫早湾干拓事業(長崎県)の堤防排水門の開門を命じた確定判決を巡って、開門を強制しないよう国が漁業者に求めた訴訟で、諫早開門滅命令「無力化」を命じた判決をみれば、よくわかる。また、沖縄の米軍普天間飛行



場（沖縄県宜野湾市）の名護市辺野古移設を巡って繰り広げられている沖縄県と国とのさまざまな訴訟をみてもよくわかる。このように、日本ではこの手のトコトンこじれた事件ではトコトン争われるのが当然だから、本作にみるワハビー弁護士とナディーン弁護士のトコトン勝利にこだわる姿を見ても、敗訴した側は当然上告するはず。私にはそう思えたが、さて控訴審判決は？そして、それに対するトニーとヤーセルの対応は？

前述のように、本作でトニーとヤーセルがこだわったのは人間の尊厳。2人とも自分のそれが傷つけられたため互いに相手を非難し、責任を負わせようとしたのだが、法廷で上映された「ダムールの虐殺」を見ると、レバノン市民としてパレスチナ難民をバカにしていたはずのトニーも「ダムールの虐殺」では大変な被害者だった。そんなことを法廷の場で再確認させられたトニーは、今いかなる気持ちで控訴審判決を？他方、あの時トニーがわざわざ引き返して俺の車のエンジンを直してくれたのは一体なぜ？さらに、俺はトニーにパンチをくらわせたが、俺もトニーからパンチのお返しを受けたから、それでおいこ・・・？そんな思いを持つヤーセルは今、いかなる気持ちで控訴審の判決を？

徳川幕府軍による（第1次）長州征伐は西郷どんの努力によって無事「和解」が成立したが、さて、レバノン初の本格的法廷モノとして登場した本作の和解の道とは？本作の邦題は「ふたつの希望」とされているが、なぜそんな邦題に？また、「ふたつの希望」とは一体ナニ？

2018（平成30）年8月2日記